謡曲

高砂

高砂(たかさご)や　こ乃浦舟(のうらぶね)に　帆(ほ)をあげて
こ乃浦舟(のうらぶね)に　帆(ほ)をあげて
月(つき)もろともに　出汐(いでしお)の
波乃淡路(なみのあわじ)の　島影(しまかげ)や
遠(とお)く　鳴尾(なるお)の　沖過(おきす)ぎて
はや　住吉(すみのえ)に　着(つ)きにけり
はや　住吉(すみのえ)に　着(つ)きにけり

謡曲「高砂」のあらすじ

肥後の国（現在の熊本県）阿蘇の宮神主の友成は、都へ上る途中、高砂の浦に立ち寄ります。

そこに老夫婦が竹杷(サラヘ)（熊手のようなもの）と杉箒を持って現れ、松の木蔭を掻き清めます。その老夫婦に神主は高砂の松について問いかけると、尉は、これこそが高砂の松で、自分は住吉に住み、妻の姥は高砂に住む夫婦であると教えます。夫婦でありながら離れて住んでいることを不思議に思う神主に、姥は、心が通い合っていれば離れていても遠くはないと答えます。さらに、松は古くから和歌にも詠まれ、四季を問わず、千年変わらぬ緑をたたえており、中でも特に名高い高砂の松は、末代までも相生の松と言われて、めでたいものであるとその謂われを語ります。

そして、この老夫婦は、私たちは高砂と住吉の相生の松の精であり、住吉で待つと言い残して、沖の方へ姿を消しました。

神主は、高砂の浦人に先ほどの老夫婦に出逢ったことを話し、浦人の船に乗って住吉へ向かいます。

住吉に着くと住吉明神が現れ、月の光が残雪に輝く中、住吉明神は神々しく颯爽と舞い、平和な御代を祝福するのでした。

はじめに

「謡曲『高砂』」ゆかりの地として名高い高砂神社や、神秘に満ちた石造物・石の宝殿を有し、古代より広く使われている竜山石の産地でもある我がまち高砂市。

東に加古川が流れ、北に高御位山、南に瀬戸内海を臨み、古くから白砂青松の風光明媚な泊として栄えてきた本市は、人と風土、自然がつながり合い、歴史を刻みながら今日ある文化を創りあげてきました。

今、私たちの日々は目まぐるしく変容しています。
しかし、私たちは、先人が育んだ古きよき貴重な歴史文化を受け継ぎ、育て、守り、そして新たな文化を創造しなければなりません。

本市では、平成２３年３月に「高砂市文化振興条例」を制定し、その着実な推進のため「高砂市文化振興基方針」を平成２５年３月に策定いたしました。以来、１０箇年にわたり文化活動の振興と文化によるまちづくりに取り組んでまいりました。
その成果を踏まえ、社会情勢や市民意識の変化に対応しつつ、豊かな生きがいとつながりを感じるまちを目指して、ここに「第２次高砂市文化振興基本方針」を策定いたしました。あらゆる人が文化をつむぎ、文化によってつながるまちづくりをより一層推進してまいります。

結びに、本方針の策定にあたり、貴重なご意見、ご提案をいただきました市民の皆様、熱心にご審議いただきました高砂市文化振興審議会委員の皆様をはじめ、ご協力いただいたすべての関係者の皆様に心より感謝を申し上げます。

令和５年３月

高砂市長　都倉達弥